

報告2・地中海世界から東南アジアへの視座

陣内秀信

スケールの大きな話が續いており、大変やりにくい。これから地中海の話を始めたいが、私は東南アジアには1回行ったことはあるが、あまり良くは知らない。その時の印象も含めて話を進めたい。高谷先生から送っていただいた『新世界秩序を求めて』中公新書を拝読して、大変興味深く感じた。特に世界単位は、私などがなんとなく普段思っていた事と共通するものがあり、いろいろ学ぶところがあった。地中海をどう理解するのか、ヨーロッパなのか?という問題もその一つである。先程川勝さんが引用されていた高谷先生の京大学術出版会の図1を見ると、地中海に関していえば、マグレブとかトルコが一つずつ括られているし、シリアとイラクがひとつに括られている。この辺も大変興味ある指摘である。

まず、比較をしていく時に相互の影響関係なしに、とりあえずヨーロッパの中の地中海のあり方を考える。それから後段では東南アジアと直接影響関係にあったイスラームを考え、さらにヨーロッパの植民地化を取り上げながら、地中海と東南アジアをまな板の上ののせてみたい。

最初に、私は南欧、イタリアを研究しているので、ヨーロッパの中での南と北の問題、アルプス・ピレーネの南と北の問題に関心を持っている。もちろん、イギリスと大陸という比較も有り得る。地中海学会というのが20年ぐらい前から行われており、従来のようにヨーロッパとイスラームを分けるだけではなくて、その違いだけではなく、交流や共通性も見ていく必要があると考えられてきている。カトリック世界とイスラーム世界の違いは、もちろんかなり大きいのであるが、共通性も見えていく必要がある。同じルーツから生まれたものが随分あるからだ。この辺をおさえたいうえで、東南アジアと比較していかねばならない。

家島さんがいつも一緒にお仕事されているイスラーム学の三木亘先生のお話を我々の研究会で聞く機会があり、地中海世界が持っていた豊かさ、多様性を随分強調された。たとえば、魚の種類をヨーロッパの北の海と地中海で比較してみた。地中海は大きな川が流れ込んでいないので、海がある意味で透明できれいである。それは魚を大量に養うには不向きだけれども、種類が大変多いということである。料理も多様となる。北のほうはたくさん取れるのだけれども、種類が少ない。それから、植生を考えても、例えば松原さんはトルコの御専門で御存じかもし

れませんが、アナトリア半島にある植物の種類はアルプス・ピレーネ以北全体の植物の種類と同じぐらいあるという。私が実地に検分したわけではないが、イメージとしてそれぐらい多様性がアナトリア半島だけであるということだ。地中海全体に広げれば相当になるわけである。そういう多様性のみならず、民族の多様性、言語の多様性、文化の多様性も含んでいる。また、この地中海世界には、高谷さんの『新世界秩序を求めて』にもあるように、ヨーロッパ、西洋が作り出したルールではない方へ展開していこうという傾向がある。ヨーロッパには個人主義、人間中心主義、普遍主義的な発想というものがあると思うが、地中海ではそうではない方向を求める考え方がある。つまり、地中海人間というのは個人主義ではない。ネットワークだという。ネットワークの中の一人一人がいて、いつも他者と集団の中での自分というものの意識する。つまり、商売、交流が非常に重要なわけである。絶対的に外部から自立した個人ではない。それは今の彼らを見ていても、付き合っている、町の構造を調べていても非常に良くわかることなのである。イタリア人も相当そういう性格をもっている。ところが、フランス人になると非常に個人主義、多分イギリス人もいい意味での個人主義だと思うけれども。

実際ホールが言った個体距離、つまり人と人が好ましいと感ずる距離が非常に近い。それは都市の構造、空間のあり方というものにも反映していて、地中海都市というのはイスラーム側も南欧側も非常に空間のスケールがコンパクトで、密度が高い。人と人とが、非常に近いところにいて、個人というよりも家族のプライバシーをうまく保ちながら、高密な空間を作っている。私の一度しか行ったことはないその体験からしても、東南アジアにもそういう多様性と豊かさとネットワーク性みたいなものが非常にあるのではないかと直感的に感じる。実は東南アジアに行ったというのは、例のイスラームの都市性の研究活動があった時に、佐藤次高さん、樺山さん、濱下さん達と一緒だった。シンガポール、ジャカルタ、バンコックを中心にまわったのであるが、モスクばかり探して歩くという大変おもしろい経験をした。つまり、そういう東南アジアにイスラームが入っていった時の受け止められ方、変容の仕方を見たのである。もちろんモスク、イスラームばかりではなくて、中国人のつくった町とか、トータルな像も見ようとしたのだが、これは後段でお話したい。

地中海世界の南側、そこにはアラブ、イスラーム圏があり、地中海世界の北側にはヨーロッパがあり、私はイタリアを中心に行っている。今日はヴェネチアの話は直接東南アジアと結び付けにくいので、もう少し広い視野で考えてみたい。高谷さんの著書にも、風土、田園風景の比

較を書いておられて、ヨーロッパの場合は完全に人間がもう一度作り直した、植え直した自然であり、田園だと。私も特に地中海の回りはそうだと思っている。しかし、都市と田園が切り離されるのではなく、地中海の場合は有機的に結び付いているのではないかと思う。もう一つ高谷さんの指摘の中で、砂漠の思想と森の思想と都市の思想の三つがあるという点に大変興味を持った。これをヨーロッパ、地中海世界に適用してみると、おそらく地中海世界は砂漠と都市がくっついている。ただし砂漠といってもアラブ、イスラームでは灌漑を古くから行っており、それを緑ある地域に変え、あるいは都市の中にオアシスを作ってきた。自然を積極的に取り入れ、人間が作りだした秩序のある快適な空間を、そして生産力のある場所を作った。おそらくアルプス・ピレネー以北は、森と都市がくっついたのではないか。阿部謹也さんがおっしゃっているようなドイツの深い森という中には、悪魔が棲んだり、異界みたいなものが広がっていた。キリスト教が支配する以前には特殊な異界と交流できる超能力を持ったような人達も尊敬され、差別の対象ではなかったようである。そういう世界はゲルマン、あるいはアルプス・ピレネー以北のイメージであり、地中海世界はそういう要素がなくはないが、少ない。

去年シチリアのアグリジェンに近い小さな町シャッカ、これはチュニジアに一番近い所であるが、そこを調査した。今年の夏はチュニジア側の調査に行っている。大変おもしろいことに遭遇したのだが、シャッカの町では城壁の中にいまだに農民がいっぱい住んでいるのである。それゆえ、都市の定義を地中海では、もしかしたら地中海に限らないかもしれないが、もう一度考え直さねばならないだろう。実はシャッカでは漁民も城壁の中にいっぱい住んでいる。もちろん、田園の中に分散して住んでいる人がいなくはない。かつては田園の中に住んで城壁の中にセカンドハウスを持っている農民のタイプと都市の中に専ら居住して外に働きに行くタイプがあったようだ。最近が多くが都市に戻ってきている。それからスファックスというチュニジアの町に行くと、今年調査したが、もっとおもしろい話を聞きました。都市の中に住んでいる人達としては、漁民、農民、職人、商人などがいるが、みんな複数の職業を持っていて、全家族が田園の中に農場を持っていた。気候のよい時期に農業をやり、それ以外の季節には商業をやったりする。漁民も農場を持っている。それだけ田園と都市の交流が重要だったのだ。フィレンツェでルネッサンスが生まれたわけだが、あれはトスカナの非常に美しい田園の美を背景に持って、そういう価値観で生まれた。古代ギリシャ・ローマ時代も田園をあこがれたわけだが、そういうものがまた中世とはまた違うフェーズで復活してきたことが、ルネッサン

スのひとつの背景にあると思う。

イスラーム側とヨーロッパ側で決定的に違うのは、住宅の構造、広場のあり方だ。共通していることは、公と私の空間をうまく都市の中で分けていく点である。アラブ、イスラーム都市だとトルコの都市もそうであるが、中心部に大モスク、バザール（スーク）、これらは公的セクターである。しかし、公といってもヨーロッパのように自治体が公権力ではなくて、商業である。これは非常に重要である。商業が都市の中でどう扱われるかというのは大変重要で、イスラームの場合はアドミニストレーションというのは自立したものがなく、むしろ宗教と商業がくっついている。これらが中心の公的セクターを作っている。その周辺によそ者が入りにくいように迷宮化してそこを住宅地に行っている。そこが女性と家族の世界である。その間にしばしばトンネル、ゲートを設けて、結界、仕切りをいれる。これもチュニジアで徹底的に行われていて、よそ者が入ってこないようにするわけである。こういう公的空間と私的空間の区別が非常に上手である。ヨーロッパではギリシャのアゴラから始まって、非常に明快に広場、つまりそこでシビルな権力の中心を作っている。視角的にアイデンティティを作り出した。ところが、イスラームのほうは公権力が景観の上で現れるということはしなくて、むしろネットワークの中に沈んで隠れている。ですから、イスラーム都市というのは極めて機能的で、実利的で、快適性を追求する非常に優れた、ただ近代の価値観にはなかなかのってこないような都市なのではないかと思われる。

ヨーロッパでも、南イタリアを調べていると、やはり公と私の空間を非常に上手に分けている。シャッカなどでは、住宅地のかなりの部分が袋小路、日本の路地のようにあり、日本の構造と地中海の都市と似ているところがある。住宅地のある袋小路にはよそ者は入りやすく、非常にセキュリティが高い空間であって、一軒一軒は庭を持っていない。ところが、アラブ・イスラームでは旧市街の中では100パーセントに近く大きな中庭がある。ですから、南イタリアで私達が調べているところでは、一軒一軒が非常に小さい、その代わり袋小路でみんな共有して、近隣の付き合いが大変強い。イスラームのほうはハーラあるいはマハーラという地区の付き合いは強いが、中庭の中で基本的には付き合いが行われる。これはどうも家族のあり方と関係してそうである。イスラームの場合は3世代同居、子供達が結婚後も出ていかないで同居するケースが多い。したがって、各住宅にたくさんの人が住んでいる。イタリアのほうは、御専門の先生にお教えいただきたい点だが、古代から核家族にむかう傾向があったらしい。現在

調査しても、結婚すると出ていってしまう。ところが、近隣には住んでいる。そういうことが住居の形態にも反映している。女性がどのように振る舞うかという点も相違が見られる。例えば、私達が調査に入った時でも、南イタリアの町では女性達はわいわい楽しんでいて、われわれもずっと入れる。他方イスラーム側だと、なかなか入れない。家族の形態、女性のあり方、公と私のあり方、住居の形態、そして地区の構造がイスラーム側とヨーロッパ側では共通性もあるが異なる点も大いにある。

建築の側から直接東南アジアと地中海世界との関係性がありそうだと考えられるのは、やはりイスラームが一つあると考えられる。それともう一つコスモロジーはどうなのか？という点である。おそらく高谷さんの「世界単位」の区分と関わってつくられる。例えば、ゲルマン世界にはある種深い森があつて、異界みたいなものが捉えやすくあると思うのだが、私も地中海でそういう聖域が古代から綿々と続いている所はないかと探していた。それがちょうどサルデーニャにかなりあることがわかった。サルデーニャは紀元前1500年ぐらいからローマに滅ぼされるまで、ヌラゲ人というのがいて、彼らの巨石文化があつた。こういう巨石文化の跡が聖域として受け継がれている。ローマ人も尊重し、キリスト教徒の時代になってもこれを尊重する傾向があつた。そういう物に寄り添うように、修道院ができたり、キリスト教の聖地ができた。これらは街の周縁部分にあるけれども、町から聖人のお祭りのパレードがそこまで繰り出す。ノヴェーナといってそこに9日間泊まり込んで、祈りと最後は祭りをを行う。古代から続く土地に根ざした記憶を大切にしている。また、グロッタという洞穴の中に礼拝堂を作る系譜もたくさんある。キリスト教の時代になると、普遍主義、あるいは空間を均一化するということが当然あるが、やはりトポスは地中海の中にも生きているようである。しかし、それ以上に東南アジアは、バリ島などで建築のほうでも研究が進められているが、ヒンドゥーなどの濃密なコスモロジーがあるように思える。東アジアであれば、中国の風水の影響は強く、日本もこの系譜の上にあるようだ。これに対して、地中海世界特にイスラームは少ない。

イスラームが直接東南アジアに入って来てからのことについて考えてみたい。前回の東南アジア調査のときにも、実はイスラームというどうしてもアラブ、中東のイスラーム都市をイメージするのだが、これは「いかん」と議論された。乾燥地帯で生まれたそのイスラームの都市空間というのが東南アジアに行った場合、まるで変容してしまうというおもしろさを感じた。一つは、空間的に、モスクにしても住居にしても中庭なんて全くない。あるはずがないわけで

ある。というのも、元々の文化の系譜が違うからである。生態系から見ても全く異なる。蒸し暑い所で中庭など作ったら、かえって窒息してしまう。これは乾燥地帯の文化で、石造、積石造の文化であるがゆえに中庭なわけで、木造で高床式ではそのような建築様式にはならない。モスクも住宅もベランダを持って外にオープンである。いわゆるコロニアル式の建築がヨーロッパ人の手でつくられたが、それにむしろ近い。気候風土に適した形式である。当然ながら、ハンマーム、公衆浴場もないのではないかと思われる。川に飛び込んだほうが良いはずだからである。かつてローマ人が作り上げたお風呂の伝統は、トルコも含めたアラブのイスラーム圏では普遍的に広がっているのだが、東南アジアにはどうもなさそうである。ただ共通しているのはバザールである。ジャカルタで随分見た。中東の都市のバザール、スークは面的にかなり広がるが、インドネシアで幾つか見たものは線的であった。イランでも線的なバザールが多いのでオリエンタルな一つの特徴といえるかもしれない。線的というのは、一本の道のまわりに店が張り付いている。アレppoにしてもダマスカスにしてもチュニスにしても面的に広がっている。日本も一本の道筋に商店街が多いのではないだろうか。

高谷さんはバンコク都市形成史に触れてらっしゃるが、チャオプラヤ川の東側に王宮ができ、寺院ができ権力の中核となった。そのまわりに中国人やインド人の商人が配された。結局商業と宗教と政治をどういうふうに空間的に組みあわせるか、これはかなり比較の上でおもしろいポイントだと思われる。モニュメンタルな建物がどのようなあり方になるかということも関係していて、ヨーロッパの場合特にイタリアですと、都心に市庁舎とカテドラル、ドゥオモが置かれている。大きい都市の場合この俗と聖の権力を必ず離して置く。本当の中心は市庁舎である。これはローマ時代のフォーラム、世俗の権力、マーケットもそこにあつた。これを受けている。ドイツよりもイタリアの都市の方がどちらかというとな離す傾向にあつた。フィレンツェにしてもシエナにしても離しているし、特にヴェネチアは遠くに離している。アラブ・イスラームの古い中世的な構造というのは、世俗権力の建物というのは表に出てこない。城、カレとかカラアとかは都心には絶対来ない。権力構造が視覚化されていない。むしろ迷宮化している。モスクのミナレットぐらいが目立つ。東南アジアの場合は非常に宗教権力と王権の城があつて、しばしば宗教的なものと結び付いている場合が多い。あるいは東アジアで言えば、中国の皇帝が自ら政治的儀礼、宗教的儀礼を行い、北京の町はコスモロジーを表現している。ヨーロッパの側でも、ビザンチンなど政教一致で、皇帝が宗教的にも重要である。ヴェネチアは比較的そ

れに近いところがあった。これらの構造の比較も、空間的あるいは都市の風景的には非常に重要であろう。

逆に庶民の生活空間で、インフォーマルセクターが発達しているとよく都市計画の人達が東南アジアについていう。また、インドネシアのカンボンのイメージだが、非常に路地が入り組んで迷宮的で、そういう所に住んでいるイスラームの人達はプライバシーも何もないわけで、女性達も外へどんどん出てくる。これは中東とは全く雰囲気が違う。また、地中海世界というのは土地の問題があるのだが、不法占拠が昔からある。今でも、トルコなどではゲジェコンドゥといって、一夜にして巨大な住宅地ができてしまうこともある。実はローマでもマスタープランで住宅地になっていないところでも勝手に住宅を作って、既成事実化していく。アプシーヴォという。これは地中海世界の特徴のようである。東南アジアにもこういうのはあるだろう。例えば、カンボンが形成されていくように。公的権力が全体のプランニングを行うような公的セクターの強さは、ヨーロッパに典型的に見られる。産業の組織化、近代的軍隊の組織化同様、都市の組織化、空間の組織化、管理はヨーロッパが作り出した発想である。

ヨーロッパが植民化して入っていった時、一つ特徴的だったことは、自分の国、土地でできなかったことを新天地に行き行って植民都市を堂々とプランニングして建設した、ということである。これは実は昔からあり、例えばギリシャ人がそうであった。アテネやスパルタでできないので、小アジアに出かけて行ってミレトスなどでヒポダモス式の都市計画を実施した。ナポリもそうして生まれた植民都市で、非常に明快なプランニングの下に建設されている。スペインが南米に行き、見事な計画都市を作っている。日本人も満州でおこなった。東京ではできないことを。イギリス人はニューデリーを非常に明快に作った。そういうことが逆に東南アジアの19世紀以後の有り様をすごく引っ張っていったのではないかと思う。ヨーロッパ以上に近代的、ヨーロッパ的発想をアジアのほうが真に受けてしまって、まだこれに乗っかっている状況がいっぱいあると考えられる。例えば、機能を分けて配置するゾーニングという問題もヨーロッパで生まれて、日本ではまだ非常に強い。ヨーロッパは近代の反省に立ち、もうそれを止めてしまって、機能がミックスし魅力をもった歴史的街区を再生し、あるいは歴史的な建物を修復して現代のニーズに合わせて用途を変えながら、複合的な環境を作ろうという発想の転換が起こっている。しかし、アジアの方がどんどんゾーニングで都市を開発しているように見える。それは19世紀以後ヨーロッパの計画手法大きなインパクトを与えたからであろう。も

う一方で、コロニアルスタイルとか、ショップハウスとかは、ヨーロッパからもたらされた時にはヨーロッパにはなかったものであるが、東南アジアの気候風土に適するかたちで、素敵な建築文化として形作られた。今からすると非常に重要な財産になっている。東南アジアではその歴史的重要性に少しずつ気が付きはじめて、例えば、近代的開発ばかりをおし進めてきたシンガポールでも、中国人の商人が住んでいたショップハウスを保存しはじめています。これは観光的にもそうしていかないと近代ビルだけでは人が来なくなるのではないかという思いもあるようである。同様にハノイも文化的なものを見直しを行っている。つまり、ヨーロッパの植民地支配の時代につくられたものも含めて、アジアの国々が自分の文化的アイデンティティを真剣に探し始めているのも事実である。以上です。

質疑応答

渡辺 私はアルプスの北のことをやっている。実はアルプスの南には行ったことがない。東南アジアとの比較において、ヨーロッパとは何か？ということにかかわってくる問題があるように思う。アルプス・ピレネー以北以南という分け方を示されたが、ピレネーはともかく、アルプス自体はどちらに入るのか？という問題がある。アルプス地域は固有な空間である。さらに、最近注目されていることだが、ヨーロッパで最も所得水準が高いのがこのアルプス地域なのである。スイス、南ドイツ、北イタリア、ローヌ・アルプである。いわゆる南イタリアのイメージとは異なって、ドイツの平均よりはるかに所得水準が高いのである。それで北イタリアでは北部同盟が活躍して、とうとう通貨まで発行すると言い出した。パダニア共和国とまで言ってい

る。ポー川によって作られたロンバルディア平原は範疇的には北ヨーロッパに入るのではないかと思う。北イタリアをここでいう地中海世界の中に含めていいのかどうか。経済水準はともかくとして、都市計画、家族構造、住宅構造そういう点から見て、北イタリアの位置付けを少し教えていただきたい。

陣内 的確な御指摘だと思う。私も北イタリアはアルプスの北の国と近いと思っている。去年トレントに滞在する機会があったが、私の見てきたイタリアと違った。まず、その郊外にでると、斜面にポツン、ポツンとログハウスみたいな家がきれいに点在し、スイスと同じ風景であった。人の表情も振る舞いもいわゆるイタリア人、地中海人と違う。豊かで、メンタリティもアルプス以北の人達と似ていると感じた。どこで、地中海的なものとそうでないものを分けるかというのは大変

難しい。北イタリアは平野にできている町が多いので町並みの雰囲気もベルギーの平野の都市と近いものがあるのではないかと思う。トスカーナなど中部まで来ると丘陵地帯に町ができ、ブローデルも指摘しているように、マラリアから守る為に丘の上に町をつくり、密度がたかい。住居の構造も都市構造もやはり地中海的である。裏庭などない。だいたい平野部に12・13世紀ぐらいに開発されたところはもうフランドルの都市の開発と非常に似ている。特に、土地の割り方や街区の作り方がである。ですから、いわゆる中世都市というのはイタリアとフランドルで共通している。最近都立大の河原温さんがこういう研究をしている。ギルドや宗教的組織も含めて似ており、実際に交流もあった。それ以前につくられた都市が非常に地中海的ではないかと私は考えている。例えばヴェネチアはものすごく地中海的である。イスラームの都市と似ている面がある。ヴェローナなどは12・13世紀に発展したが、コアにはしっかりローマの部分があり、ローマのグリッドがあれだけ受け継がれているのはやはりイタリアである。ドイツ、フランス、イギリス、ベルギーではなかなかローマの構造を復元するのは難しい。その持続性はやはり地中海的だと考えている。

応地 ロンバルディアと北西ヨーロッパと

の間における農業革命の基盤の違いが大きくあると思う。ロンバルディアの場合だと、やはり灌漑の拡充ということが農業革命の前提としてあった。そういうインフラストラクチャーなしに農業革命を実現した北西ヨーロッパと大きく違うと考える。イギリスがインドを支配して、19世紀の中頃ぐらいから、北西インドへ勢力を伸ばしていく中で、灌漑施設を作っていた。そして、地租を上げていった。その時のモデルを提供したのが、イタリアの灌漑であった。あの頃は農業革命の地中海への波及の前提としてのインフラストラクチャーに注目したのである。そういう意味で、地中海のロンバルディアと北西ヨーロッパは違うといえよう。

渡辺 灌漑について少し伺いたい。あれは水田だったのか？ポー川の周辺ですが。

応地 水田もあった。しかし、もっと内陸のいわゆる小麦を中心とした地域でも、イネを含めたより輪作的なものを植えるのにそうした灌漑をおこなった。つまり、夏作を拡充させるということだ。

渡辺 イタリアの養蚕地帯はどこなのだろうか？

応地 北イタリアだろう。

渡辺 つまり、イタリア産の生糸がスイスやフランスへいき、その絹工業の原料基盤になり、そしてそれを染める為の染料はまさにコ

ロニアルグッズで、非ヨーロッパ世界から輸入される。そこで、先程の川勝さんのお話と関わってくる。こういう意味では、イタリアの農業は、西北ヨーロッパ繊維工業の重要な原料基盤の一部であった。耕作・畜産農業そのものは違うかも知れないが、有機的に一種の産業連関がヨーロッパの北と南の間にあった、と言えないだろうか。

応地 私などむしろ蚕あるいは桑というのは、西アジア、インドあたりのもので、むしろ歴史的に考えても、リヨンの養蚕業はイタリアからの導入で、後に自立していったと考えている。そういう意味でいうと、南アジア、西アジア、地中海的なものの北西ヨーロッパへの波及と考えられよう。だから、独自のものが二つ平行し、同時にある種の連携関係が生まれたというよりも、南から北への波及として養蚕は捉えられると考えている。

渡辺 少し時代がずれているかもしれないが、18世紀から19世紀にかけて、産業革命期には、綿が基本的なのだが、しかし、綿と関わって、絹もヨーロッパで非常に大きな意味を持つ。19世紀の後半になると、もちろん日本からの輸出もあるが、ヨーロッパの中で、生糸は基本的に自給されていた。供給地は北イタリア、南フランスであった。この地域が、いわば西北ヨーロッパの絹工業発展の原料基地として機能した。その意味で

養蚕地帯というのは北ヨーロッパの工業構造と有機的な関連を持っていた。

応地 そうだと思う。おそらく日本から入るのは、この地域で病気が発生した1870年代後半あたりであろうか。

坪内 少し話を変えてみたい。陣内さんには東南アジアとヨーロッパ、地中海をイスラームで比較してもらい、非常におもしろく感じた。この話を進めるとさらに興味は広がるであろう。そこで、都市で比較するという時、東南アジアのイスラームをどの都市で、どう見るのかというのが気になるところである。今、お話になった東南アジアの都市はイスラームでもって成り立っているところではないようだ。地中海のほうは、具体的な名称をもっておさえられているだろうと思うが、東南アジアの場合はどこでそのイスラーム的な都市を見るかということが重要になってくると思うが、具体的な都市を見ておられないのではないか。

陣内 モスクは見てきている。

坪内 植民地都市の中にたまたま建てられたモスクを見てこられただけではないか。東南アジアの都市を見ると、ヒンドゥーの時代には都市的様相は極めて明確に出てくる。イスラームも都市を作るが、当時作られたイスラームの都市は極めて小規模なもので、都市とも村ともつかず、都市機能だけは有してい

る集落といったものが多かったのではないかと私自身は考えている。そうなるかどうかでどう比較するかが重要になる。東南アジアの都市の特徴は、建物としては木造だし、その分だけ形がはっきりしないかもしれない。人の数も少ないし、小規模である。なおかつ都市が動いていく。多分モスクは非常に大事だが、王宮が中心になるだろう。王宮に附属する形で大きなイスラーム寺院が近くにくつつくという構造があるだろうと思う。もう一つ市場がどこか近くにくつついてくるんだと思う。その3点セットが必要なのだが、これに付随して、都市は民族的に単一で形成されるわけでもない。場合によればアラブの人がおり、マレーや中国系の人がいるというふうに、こうしたグループがそこそこに別のコミュニティを作って、なんとなくふんわりとした都市を作り上げている。都市というか集落あるいは村の連合体というものを作り上げているというのが、私の東南アジアのイスラーム都市のイメージだ。となるとどこで都市を比較するかというのが重要である。イスラームの場合こういう問題が出てくるし、それでは東南アジアの都市の別の形を何で考えていかかという、応地さんはこれをやりかけておられるが、ヒンドゥーの都市的なアイデアはどうなっているかというのも大事な問題だ。もう一つは植民地都市の要素も

あつて、何を比べるかという問題を考えてみたい。そういう印象を受けた。

陣内 教えていただきたいことばかりである。比べていきたい。

応地 今日の問題で、商業、宗教そして政治、特に商業権力と宗教権力の関係という点が取り上げられた。これは私が以前から取り組んでいるテーマでもある。主に日本のことなどであるが、東南アジアを見ても、この関係は、はっきり言ひまして世俗権力が確実に大きくなり、宗教的なものを従属させる形で展開している。例えば、タイにおけるスコタイ、アユタヤ、バンコクという一つの系列を考えると、スコタイの前史はアンコールトムにあるわけだが、アンコールトムの場合はヒンドゥー的なコスモロジーで確実に説明できる。スコタイは、ヒンドゥー的なコスモロジーと王権が並立する。アユタヤの場合は王権が中心になって都市を作り、寺を従属させる。しかし、その王宮と寺院との間には空間的に距離が開いている。しかし、バンコクになるとこれが一体化して、確実に宗教的なものを王宮の下に従属させる。そういう一つの系列がタイなどでは明らかに見える。そしてそれは決して宗教的なものが優位を持っているのではなくて、むしろ世俗権力優位の中での都市の再編であると私は考えている。

家島 陣内さんが調査される場合、現在の都市をご覧になっているわけだが、たとえばシチリアだと、ローマ時代、さらにそれ以前に始まる様々な遺跡があり、中世だとシチリア・ノルマン王国があってイスラームと融合した王国を作る。さらに、近代になって、完全なキリスト教の世界に入るわけであり、同じ都市といっても時代に的に様々な意味・内容を変えている。従って、現在の都市を見て、どういうふうにその都市の特質・性格を読むかは難しいところであろう。

陣内 ただ地中海世界はもの残りがいいので、東南アジアや日本と違って、建物の痕跡というよりは骨格が残っているケースも多い。建物そのものもそして道路、街区、様々なレベルで残っている。もちろん住み手が変わったり、機能が変わったり、意味が変わってきているので、それを遡って見ていく場合には、いろいろな手続きが必要である。日本でやる以上にはできるだろう。

家島 地中海の都市は多くが石の世界ですね。従って、残りがいい。

陣内 さきほど、どこでヨーロッパの北と南の線を引くかという話があったが、今はからずも石の世界とおっしゃったが、本当に石ばかりでできている文化圏というのは少ない。地中海的世界のある部分が天井も屋根も石でできていて、イタリアのローマ、フィレン

ツェ、特にヴェネチアなどは床や梁や小屋組みなどは木である。ヨーロッパは基本的には15世紀ぐらいまでは木造であった。ハーフティンバーである。アムステルダムなどでも16世紀ぐらいまでは、ハーフティンバーの建物だったことが絵画資料でわかる。その後レンガ造りに変えていった。コペンハーゲンなどでも18世紀ぐらいまでハーフティンバーで、大火でハーフティンバーを禁止してから石造になっていく。ロンドンの大火もそうである。同時にしだいに美意識も変わっていった。ハーフティンバーが表面に出ていることを嫌うようになる。ルネッサンス以後の古典主義の時代には表面を隠していった。これがロマンシズムの頃にピクチュアレスクなもの好まれて、むしろ剥がしていく。ヨーロッパ自身も何を自分の価値評価の軸にしていくか、時代と共に変わっていると思う。本当に石の文化というのは意外と少ない。

家島 地中海世界のイスラーム都市の施設、例えばジミウ、マドラサ（高等学院）やハーインなどを見ると、表面的には石なのだが、その内部は巧みに木材が使われている。天井、壁、窓枠、ミンバルなど多量に木材が使われて、木材の持っている柔らかさとか装飾的技巧が表現されるので、石だけの世界ではなさそうである。かさばって重い木材の貿易は非常に重要であって、木材はかなり遠隔地に運

ばれている。都市の中で、木材の用途は多いが、建築面でかなり広く使われている。

陣内 さきほど渡辺先生が御指摘になった川、ヴェネチアなどでもアルプスの裾の森林から大量に木材を切り出して川で流した。河川交通は非常に重要であった。

角山 ところで当時の都市の人口について少し伺いたい。16世紀における地中海最大の都市では人口はどのくらいだったのだろうか？ヴェネチアなどは？

陣内 ヴェネチアは18万ぐらいだった。16世紀頃。

角山 それは最盛期ですね。東南アジアではどれくらいだろうか？

坪内 大陸部は大きいのが少しある。20万を越える都市はないと考えたら良いのでは。10万越えるのが、幾つかあるぐらい。島しょ部にいくともう一回り小さくなる。

角山 例えばマラッカなどは？

坪内 その範囲が問題だ。城壁の内だけにするのか、外もいれるのか、という問題である。大きくて10万ぐらいであろう。人口でみる限り、東南アジア島しょ部には都市はないといえよう。1万あったら都市といえるのでは。アチェも全体で10万ぐらいはあったのだろうか。

角山 マラッカは例外なのか？

坪内 マラッカは大きいほうだと思われる。

後にはジャカルタなど大きな都市ができる。ともかく、都市の規模は極めて小さかったといえよう。

角山 ヨーロッパでは10万というものすごく大きい都市である。

陣内 そう考えると東アジア、中国、あるいは中東や地中海の都市は圧倒的に大きかった。

家島 ヨーロッパで都市というときのどのくらいの人口規模だろうか？

角山 イギリスであればロンドンは別。あとは地方都市で、せいぜい2ないし3万で、残りは何千というレベルだった。そうするとヴェネチアはかなり大きい都市であったといえる。

陣内 ナポリとかも大きかったが、現在でも人口1万以下の町に住んでいる人の比率は極めて高い。1万いると随分立派な町に見える。

角山 ヴェネチアは18万がピークで減少していった。他方、実は大阪の堺が1615年に大阪夏の陣で焼けた時、その焼失戸数が2万であったといわれる。一戸3人ないし5人とすればこれをもとに、環濠内の人口が6万ないし10万ということになっている。このレベルの人口はヨーロッパでいえばだいたいマドリード、フィレンツェの人口に匹敵する。16世紀は東アジア、東南アジア海域

が非常に栄えた時代である。その時にマラッカが10万ぐらい、アチェもそれぐらいといわれたが。

坪内 アチェの都市中心は1万もいないであろう。マラッカも都市中心では2から3万と考えておきたい。

角山 例えば、マニラを1571年スペインが占領し都市を建設した。そして1600年頃には人口は2万いかなかったようである。それゆえ、堺に来た宣教師達は大変驚いたのである。東南アジアから来たわけであるから。

16世紀終わりに堺は環濠の中だけで6万ないし10万人の人口を抱えており、マラッカよりももちろん大きいわけである。

坪内 東南アジアの都市は、環濠というのはあまり見られないのではないかと？都市とその周縁の境目は曖昧である。

家島 地中海だとまさにここが都市だということの方が明白である。

陣内 ただし、トルコは城壁を必要としない文化である。

家島 アラビア海の港というのは、ポルトガル以前には城壁がない。

角山 私はその港に興味を持っているが、東南アジアの港はいったいどういうものか？南蛮屏風に描かれている南蛮船によって特定の港を想定することはできないが、南蛮船が砂浜近くに描かれたり、砂浜の海岸から直

接荷物をおろしている船が描かれたりしている。私はこれは違うのではないかと考えている。積みおろしの場所には石段があって、板を渡して作業をしていたのではないかと。これを港とすれば、バタビア今のジャカルタは1650年のクレメントの地図及びニューホフの記述によると、やはり環濠都市と言えるのではないかと。町の中を運河が通じていて、ちょうどアムステルダムみたいに商人の家に船着き場があって荷揚げ、荷おろしを行っていたのではないだろうか。参考になるとすれば、日本では和歌山・橋本の紀の川のあたりなど川に降りていくところに石段があってそこに船がつく。京都の伏見もそうだ。

木村 インドのスーラトという町もそのようであった。川の石段を降りていく。イギリス、ポルトガル、オランダの商館があったところだ。

角山 これらがあの当時の港湾施設だと思う。

応地 ベトナムのホイアンという町、マラッカの場合も中国人街はそういう水路に面して、そこから荷揚げしていた。もう一つ東南アジアには都市がないという話だが、かつてアユタヤに行って大変びっくりした。私は、デリーに比べたら、東南アジアの都市なんて小さいものだろうと考えていたが、どうしてもものすごく大きな町であった。家の

住み方が違うとは思いますが、面積が大きいし、王宮も寺院も立派で、海上交易で海の世界に繋がっている都市がデリーのような内陸交易都市とはこんなに違っているものか、とショックを受けたことがある。アユタヤというのはすごいものだ。

家島 私は、15世紀末以前に繁栄したインド洋周辺の重要な港を数え上げたことがあるが、人口数はよくはわからないが、100以上の港があった。これらには東アフリカ海岸から中国まで含まれる。私の使ったそのアラビア語の史料の中で、東南アジアの港がかなりあげられる。ただし、港の活動や人口数は季節風の具合や内陸交易のキャラバンの動きで人の動きが激しく、ある季節には人が極端に減るということがよく見られたようである。

川勝 いわゆる「帝国の景観」といわれるものがある。イギリスの場合、ニューデリー、上海などそれぞれあると思うが、陣内さんが説明されたようにヨーロッパは自らの生活様式を南アメリカ、北アメリカにもたらした。それはちょうど相似形のように、アルプス以南は南アメリカに、アルプス以北なかならずイギリスが北アメリカに入っていた。彼らは間違いなく帝国の景観を残したと思う。イスラームの方はあまり残していない。港の場合は城壁と関係する。城壁は防衛、戦争と関

係する。堺もそうだと思うが、防衛を前提にした交易、あるいは商業と戦争が一体になった港の作り方と、戦争は常態ではないという港のあり方は随分違ってくる。さきほど説明しきれなかったヨーロッパの軍事革命は、火器の発明と城壁が立派になるという点である。大砲にいかにか持ちこたえるか？ということである。この発展が16~18世紀にかけて著しく見られたのがヨーロッパ。それに匹敵する地域があった。それが中国である。中国は14~15世紀にかけて強固な城壁を作り上げており、アヘン戦争の時でもイギリスの艦隊が大砲を打ち放ったが、壊れなかった。イギリス側は大変驚いてしまった。城壁を作るところ、東アジア、あるいはヨーロッパと戦ったイスラーム圏の港はかなり堅固な景観を呈するのではないかと。

坪内 東南アジアでは城壁・砦は、ポルトガル、オランダが作ったが、そういう意味では随分あるが、土着の場合相当弱いと思われる。

川勝 マニラにしてもセブにしても、残っているものはスパニッシュが作った城壁である。

家島 ヴェネチアは、地中海の各地に多くの城塞を築いた。ギリシャでの経験だが、エーゲ海、クレタ島、その他の島々にある城壁はみんなヴェネチアが作ったものだった。彼らは、非常に好戦的、独占的で、まさに暴力に

よってネットワーク、交易路と商品を獲得をした。

永沼 インド洋圏では城壁を持たない港湾都市で、オープンに通商がなされていた。そういう慣習がインド洋でなされていた根拠は、法的な保護、いわば近代の海事法みたいなものであったように思われるが、どうだろうか？あったとすれば、こうした慣習がインド洋圏の都市のあり方や通商のあり方にもどのように反映されているのだろうか？

家島 これは重要な問題で、今私も取り組もうとしている点である。史料的な残りが非常に少ないが、海の慣習、あるいは慣習法があって、海の治安が広域的に保たれていたと考えられる。海事法や国際的ルールがあったと思われるのは、バスコ・ダ・ガマの艦隊に対するインド洋世界の人々の受け止め方である。ガマの艦隊が喜望峰をまわって、キルワ、モンバサ、マリンディに到着し、アラブ系のパイロットに導いてもらってインドに向かった。バスコ・ダ・ガマが来た時、インド洋世界の人々が一番驚いたのは、ガマの一行が海のルールを知らないという点だった。彼らは、暴力的で商業のルールに無知で、極めて粗末な商品しか持っていなかった。一方、海賊は商船を捕えても奴隷にしない、殺さないとか、船を引き渡すなどの海賊のルールがあった。また、マラッカ海峡はいろいろな人、

船が通り、海峡のルールがあった。船は船団で航海しており、その船団の組み方にもルールがあった。また各港には海の法廷（バイト・アルバフル）があった。このように港がオープンであったという背景には海域にまたがる、今でいう国際的海事法、慣習法があった。地中海でも古いロドスの海事法が知られていた。

永沼 それはロード海法とも呼ばれているが、そのオリジナルが残っていないのでローマ時代の実態はよくわからない。中世についても追跡はなされているが不明な点が多い。アマルフィ海法などは都市法としてできたが地中海の共通のルールとして使われていた。コンソラート・デル・マーレと呼ばれるバルセロナの海事法も、地中海の一つの共通ルールとなったが、様々な海事判例の集大成としてできたもので、どうやらイスラームの影響を受けていると考えられている。キリスト教世界とイスラーム教世界は対立が強調されるが、通商から見ると相互依存関係の方が強かったと考えられる。そこに共通のルールの存在も見ていく必要があるのではないか？。海事法の内容を広くとらえて、地域、文明を越えたコミュニケーションの中での役割を見ていくことも大切だ。

家島 戦争・対立・緊張という側面だけで歴史を捉えるのではなく、海事法によって維持

された常態というものに着目する必要がある。インド洋では、宗教を越えての慣習法（アーダ）があった。同時に、イスラーム世界では共通するイスラーム法があり、シャーフイー派はほとんどインド洋全域に広がっている。つまり、シャーフイー法学の解釈に基づくインド洋の貿易を行い、また共通交易圏としても機能した。この法学派は商業に適合した法解釈を行う。さらに他にも、ヒンドゥーもおり、中国系もいた。慣習法があったと思われる。こうした研究を進めていかないと、地中海世界とインド洋世界がどう違うかははっきりとしないのではないか。西ヨーロッパがインド洋に出ていった時、インド洋の世界側がどのような衝撃を受けたのかとか、あるいは西ヨーロッパ側になぜ負けてしまったのか、という研究とも関連する。こうした慣習法の世界の分析は、16世紀以降の海の世界史の展開を解くにも大変重要である。

応地 ペルシャ語系のシャーバンドルと類似の制度が堺にもあったという説が日本史な

どでいわれているが、そういう名前の共通したものが地中海世界にもあるのだろうか？アジアでしたらインド洋から始まってシャーバンドルの名前でも共通しているが、そういう共通した名前の港のある種の地方役人、つまり地元の管理責任者が地中海世界でもいたのであるだろうか？共通した名称で存在したのか？

家島 港の中には様々な宗教・人種・出身者の人間がいるわけで、地中海でも、インド洋でも共通して、当然、これを統合・管轄する者はいたはずだ。14世紀以後には、港務長といって税関長に似て、国家との関りが強くなる。本来、港という一つのコスモのまとめ役は、大商人がなる場合が多かった。そしてそれぞれの代表者が集まり合議する議会制みたいなものを持っていて、宗教間の紛争を解決したり、海上での問題を解決した。これが本来のシャー・バンドルで、港の王とか商人の王とかよばれていた。15世紀以降になると国家と結び付いた役人的な税関・港務長が出てくる。